

## 「中世の供養塔婆」

### 板碑



▲上小堀地区で発見された初期の下総型板碑

鎌倉時代以降、仏教や民間信仰の普及により、さまざまな石造物が全国各地でさかんに造立され、現在も路傍や墓地などに数多く残っています。今回は、これら石造物のうち、供養塔婆の代表と言える板碑を紹介しましょう。

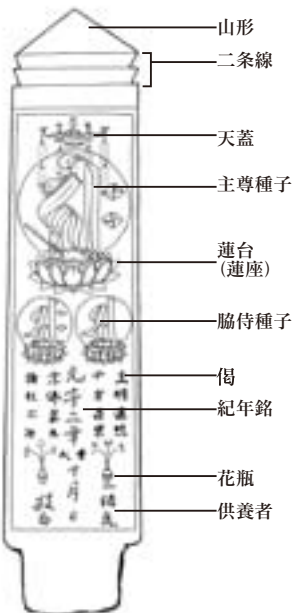
板碑は板石塔婆とも呼ばれ、鎌倉時代から室町時代にかけて盛んに造立されました。通常、板状の石材を使用し、頭部を三角形にして二条の線を入れ、その下に天蓋・主尊・蓮台・三具足（仏前に供える香炉・花瓶・燭台）とともに、偈頌（経典などにある詩文で、教理を述べたり、仏を讃えたりしたもの）・願文・年号・造立者名などが刻まれています。主尊は、仏を梵字で表したものの（種子）

が多く、仏の画像を刻んだものも見られます。また、板碑は、東北地方から九州まで広く分布し、その数は、関東地方だけで五万基、全国では十万基におよぶとされ、各地域で産出される石材の特性や信仰の差などによって、地方色豊かな板碑が造られました。関東では、緑泥片岩を使用した武蔵型板碑、千葉県

の下総地方には粘板岩や雲母片岩を使用した下総型板碑、神奈川県には安山岩を使用した相模型板碑などが見られます。

### 最古の下総型板碑

香取市は、下総型板碑の分布の中心にあたり、数百基から、千基近くの板碑が分布していると考えられます。現在確認されている最古の下総型板碑は、谷中地区にある正嘉2年（1258）銘のもので、鎌倉時代中期にあたります。上の写真は、上小堀地区の長泉院墓地で発見されたもので、初期の下総型板碑の代表例です。高さ240cm、幅58cmで、頭部は三角形に整形され、その下に二条線があり、天蓋・主尊種子・蓮台が刻まれています。主尊種子はバク（釈迦如来）です。下半部には、般若波羅密多理趣経の偈頌や「右志者為過去主君道阿弥陀仏御聖靈成仏得道也」という願文、「正元々年八月廿四日」の紀年銘、「施主定阿弥陀仏」という造立者名が見えます。主君である道



▲板碑の模式図

阿弥陀仏の供養のため、正元元年（1259）に定阿弥陀仏なる人物が造立したものであることがわかります。この「道阿弥陀仏」は、木内領主・木内胤朝の戒名「道阿了称」であろうと考えられています。鎌倉時代後期から室町時代には、板碑の造立数が爆発的に増え、月待や庚申といった民間信仰による板碑も建てられるようになります。板碑の造立は、仏教、特に浄土信仰の浸透と深く関わっており、当時の人々の宗教観を反映しているといえます。また、そこに刻まれた銘文は、文字資料の少ない中世という時代を知るための貴重な手がかりとなります。